



TITLE:

# 野生ニホンザルの日周活動リズム (Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

四元, 伸子

---

CITATION:

四元, 伸子. 野生ニホンザルの日周活動リズム(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1974, 3: 27-29

ISSUE DATE:

1974-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162526>

RIGHT:

かかわらず、種皮の部分をわずかに噛みけずるのが散見された程度であった。なお、武士泊りの浜では、ハマナシの実が好んで食われていた。

動物では、クワガタムシ、セミ、ヨコエビ、トビムシが好まれ、アブ（二種）も食われていた。

## 臥牛山の群れの社会変動の追跡と分裂群

古屋 義男（高知女子大・家政）

臥牛山の群れについては、1971年7月に個体数調査をおこない、その結果は本年報 Vol. 2 (1972) に報告した。本年の調査目的のひとつは、この群れのその後の変動を追跡することであった。

1971年当時、リーダーは第1位 Mon（推定30才以上）、以下 Katame（20～25才）、Gon（19才・一生年が確認されている）、Kobu（16才）の4頭、サブリーダーは Yasu（11～15才）、Kuni（10才）、Ken（8才）の3頭であった。

1. 1971年12月上旬、Mon の順位下降、Kobu の離脱という変動がおこった。“Mon は、第1位から第7位、つまりサブリーダーの Ken の下位にまで順位が下降した。このとき Mon をはげしく追ったのは Gon と Kobu であった。Kobu は、それより約10日後、左足に大怪我をして餌場にあらわれ、それから3日後姿を消した。怪我も他のサルによるものか、野犬によるものかわからない。”（臥牛山自然動物園藤田村治氏による）。

2. Mon は、その後もそのままの地位で群れにとどまったが、1972年9月、群れが約10日間の遊動をして、餌場にもどってきたときに姿を消していた（藤田氏による）。

3. 臥牛山の群れの個体数は、1971年の調査時に155頭と推定した。1972年に25頭出産、1972年中に捕獲されたサルは約20頭と推定される。自然死および群れからの離脱は確認されたものだけで5頭（Mon、Kobu、老令のメス2頭、1972年生まれのアカン坊1頭）である。一方、群れの移動時に個体数をかぞえる方法による1972年10月のこの群れの推定個体数は140～150頭であった。

4. Mon の群れからの離脱は、上記の結果から、メスをつれて10頭程度の分裂群を形成してでていったという可能性を否定することはできない。

5. 1972年10月には、Yasu、Kuni もくわえて4頭のリーダー、Ken のサブリーダーという構成となった。Ken は中心部ではメスに追われる等、Yasu、Kuni とは行動上、明瞭なちがいが認められる。

臥牛山の群れに関してのもうひとつの調査目的は分裂群の動向であった。1955年以後、5回の分裂がおこった

が、これまでに餌場につねに現われる主群の他に1群の存在しか確認されていない。その群れは約50頭とみられていた。

この分裂群のさらにくわしい確実な資料を得るために、本年は調査日数の大半をこれにあてたが、目撃できたのは2回にすぎず、今後課題はもちこされた。数人同時に追跡する方法など、調査方法を改めねばならない。

1. 2回の直接観察と遊動域内の住民よりの情報をあわせてみると、1群しか存在しないこと、その数は50頭よりさらに少なく30頭と推定されること、この群れは餌場へは絶対にあらわれず、遊動域を餌場の反対方向にすこしずつ拡張していること、などは確かである。

2. オスのヒトリザル、あるいは数頭よりなるオスだけのグループが、主群ならびに分裂群の遊動域外の周辺地域に出没することが最近多くなっている。これらのサルは比較的人馴れをしていることから、臥牛山の群れからでていったものと考えられる。

3. 分裂群はオスがメスに比して多い構成をもっているため、分裂後再離脱するオスがでて、分裂群はさらに個体数をへらすことは予想されていたことであった。この点のさらにくわしい調査が今後に残されている。

## 野生ニホンザルの日周活動リズム<sup>1)</sup>

四元 伸子（東大・理）

### はじめに

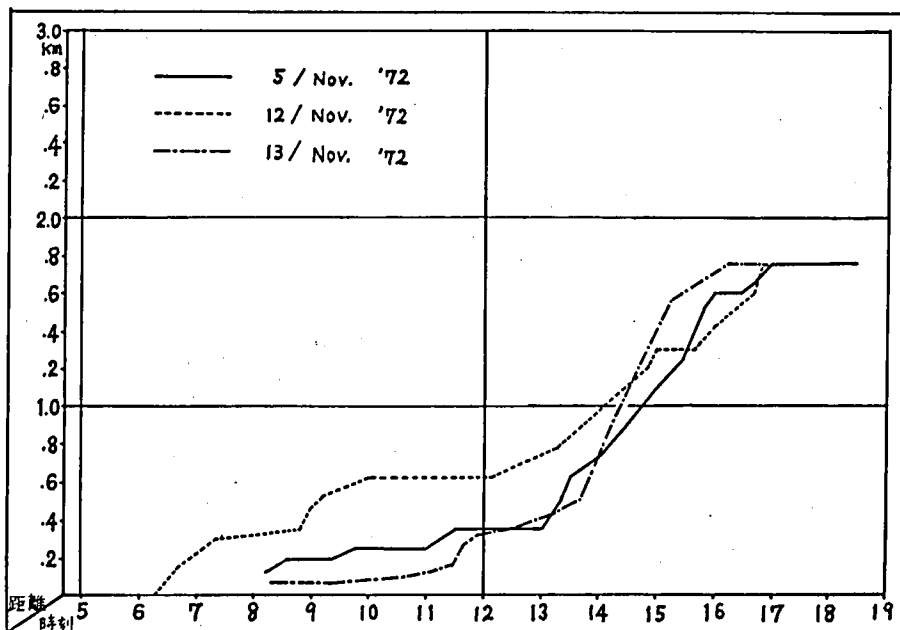
筆者は前年度にひき続いて、高岩山自然群（I-b 群）の遊動生活を調査した。現在、資料を整理中であるが、今回は比較的整理の終った1972年11月の調査について報告する。12日の調査期間のうち、観察日が6日間であり、そのうち9時間以上直接追跡のできた日が3日間である。

### 遊動の概略

11月1日から5日まで、I-b 群は観音堂、高岩山、飯場尾根、湊川上流域に囲まれる付近を遊動し、11日から13日にかけては、石射太郎の北東方向から小糸川を渡り、石射太郎を経て高岩山尾根道沿いに観音堂へ出、南下して飯場尾根の南の尾根を湊川上流へおりるという遊動を行なった。

この時期の遊動コースを規定する主要な食物は、ヤブニッケイの実であり、遊動コースを部分的に規定するものとしてリュウキュウマメガキ、ヤマノイモの種子が挙げられる。しかし、11月12日はクスノキの実が集中的に採食された。

<sup>1)</sup> 岩野泰三・西田利貞（いずれも東大・理）との共同研究。



第1図 1日の遊動の停止と移動のパターン

#### 活動と遊動距離

第1図は、11月5、12、13日の活動と遊動距離を示す。縦軸に距離、横軸に時刻をとって1日の遊動のようすを折れ線グラフで表わした。これで見ると、午前中にかなり長い停止があり、午後、特に夕方にかけて大きな移動があることがわかる。停止には採食によるものと休憩による停止があり、移動には急速な移動と採食しながら、あるいは休みつつ移動する比較的緩慢なものがある。

#### 1日の採食時間帯と休憩時間帯

今回は採食行動と、休憩の1つの指標となる毛づくろい行動を取りあげ、この2つの点からこの季節におけるニホンザルの活動リズムを検討したい。

第2図は、採食、毛づくろい行動のそれぞれに従事している個体を5分毎にカウントした数を、その時間帯の観察総数<sup>1)</sup>で除し、百分率で表わしたものである。

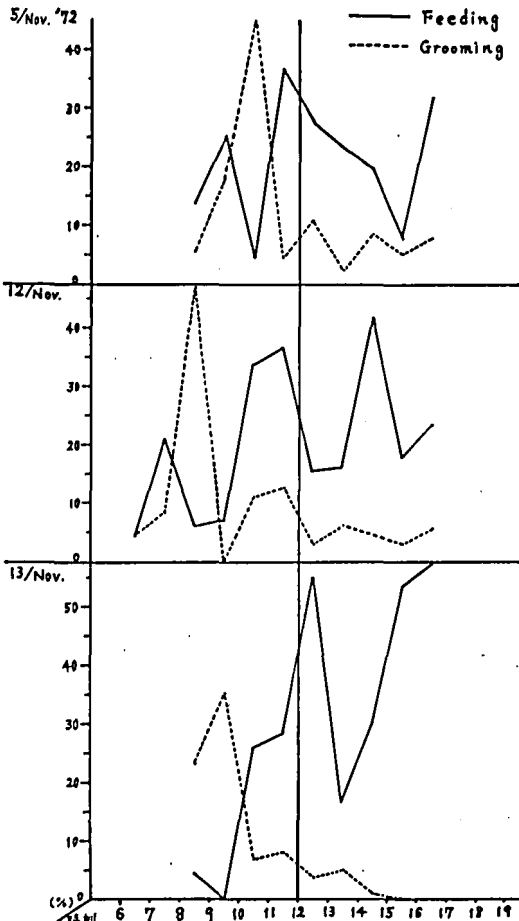
<sup>1)</sup> 前年度、サルの活動はその意味内容を表わす「採食・毛づくろい」等のカテゴリーとロコモーション・タイプあるいは姿勢を表わす「走る・坐る・歩く」等のカテゴリーを区別せずに分類し記載した。今年度はその改良として、観察された1つの活動を、活動の意味内容と、ロコモーション・タイプあるいは姿勢という両面から分類し記号でフィールド・ノートに記載した。カウントは5分毎に行なわれ、資料は1時間毎に集計された。分類の内容は次の通りである。

#### Locomotion & Posture

Sitting	typical	S
	atypical	S'
Lying	supinely	L-s
	prone	L-p
	on the side	L-o
Standing	quadrupedal	St
	bipedal	St-b
Walking	quadrupedal	W
	bipedal	W-b
Running	trot	R-t
	gallop	R-g
Jumping	up	J-u
	down	J-d
Climbing	up	C-u
	down	C-d
Hanging		H
Dropping		Dr
Branch-shaking		B

#### Activity

Feeding	F
Resting	R
Moving	M
Grooming	Gr
Self-grooming	S-gr
Playing	P
Self-playing	S-p
Quarrel	Q
Threatening	Th
Sleeping	Sl
Drinking	D
Copulation	Co
Evacuation	E



第2図 採食行動と毛づくろい行動の頻度の  
日周リズム

集中的な採食は1日3回見られ、特にあとの2回が大きい。毛づくろい行動は、多少の時刻のずれはあるが午前8時から11時の間に1つの大きな山を有する。すなわち、朝、1回目の集中的採食を行なった後、群れはかなり長時間の休憩にはいる。1時間前後の休憩の後、次の採食地へ移り2回目の採食活動を行なう。採食はそれに続く休憩に徐々に変わっていくが、午後からの休憩はそれほど群れ全体に支配的なものではなく、一方では採食しているものもあり、他方では休んでいるものもあるという具合である。午後は急速な移動、または長時間の移動が多く、したがって遊動距離は午前より午後の方が大きい。1日の遊動距離は3日とも地図上で1.8 km 前後であるが、そのうち午前中の遊動距離は0.3~0.6 km にすぎなかった。

## 高宕山 Ib 群の遊動生活<sup>1)</sup>

岩野泰三・西田利貞(東大・理)

高宕山におけるニホンザル野生群の研究は、岩野・四元・西田の共同研究として行なわれてきた。1972年1月より、'73年2月までの調査日数は123日であり、T-Ib群の総観察時間は'70年10月以降通算して470時間に達した('70年10月以降の全調査日数は240日、うちT-Ib群の集中的調査日数は158日である)。

### T-Ib 群の周年遊動域について

#### (1) コア・エリア

追跡したすべての遊動路を植生図上に投影してみると、遊動路の集中する地域があることが注目される(第1図)。この集中した地域は、高宕山周辺に広がる大きなスギ・ヒノキ植林地の北と、T-I 群餌場(石射太郎)との間の地域と、高宕山西・南斜面のモミ自然林を含む大部分落葉広葉樹2次林の地域との2カ所である。この遊動路の集中している地域を、コア・エリアと呼んでよいだろう。

遊動路は一般的に言えば、植林地を避けることが観察されており、高宕山の北に広がる大きな植林地が遊動路の集中する地域を2分したのかも知れない。なお、1~2月の遊動路は植林地を避けているとは思われないが、10月の遊動路は明らかに植林地を避けているようであり、対照的である。

#### (2) 周年遊動域の境界

ニホンザル野生群にとって、遊動域の境界は多くの場合固定的なものではないだろう。しかし、T-Ib 群の観察では、石射太郎から南に延びる尾根はかなりはっきりした西北方向への境界である。T-I 群が餌場にいる場合はもとより、秋にT-I 群が餌場にはいない場合でも、T-Ib 群がこの線を西・北に越えた例は観察されていない。

このような、かなり厳格な境界がどのような機構から生みだされるかは、興味ある問題である。

#### (3) 霊長類研究所年報 Vol. 2, p. 23 への追加と訂正

T-Ib 群の周年遊動域は約6.5 km<sup>2</sup>である。年報中12 km<sup>2</sup>内外は誤り。7~8月の遊動域の広さについては、予期されたような狭い範囲ではないことが明らかになった。また、4~5月の遊動域 もかなり広いと思われるが、周年遊動域のどれ位を覆うかははっきりしない。

遊動域が季節によってその形を変えることは、先年の報告の通りである。とくに8月下旬から10月にかけての遊動域は'71年とほとんど変わらず、狭い範囲でしかも往復する振り子のような遊動を行なっている。

10月から12月にかけて遊動域はやや拡大する傾向があ

<sup>1)</sup> 四元伸子(東大・理)との共同研究。